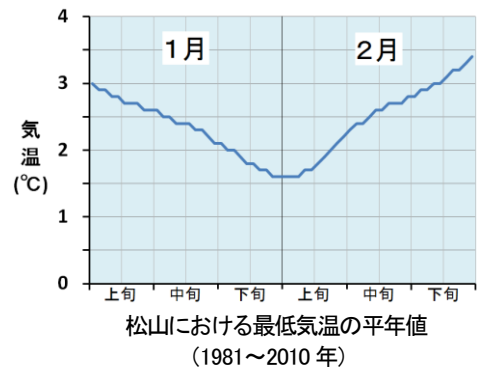


## 【1月の気象】

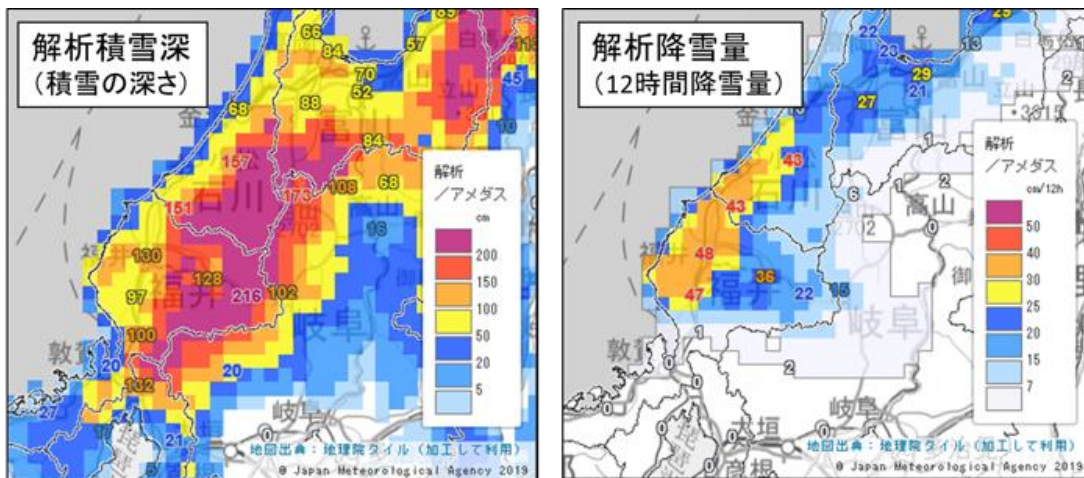
- ▷ 1月は、冬型の気圧配置や大陸から高気圧が張り出すときに、冷たい北の空気が日本付近へ流れ込むことが多いため、年間で最も寒く、雪の降る日が多い月です。平年値（1981～2010年）によると、月平均気温は松山で6.0℃、宇和島で6.8℃、松山の1月の雪日数は7.1日です。
- ▷ 12月と同じく、冬型の気圧配置が強まる場合は、強風（強風・暴風）や高波（波浪）のほか、雪による視程障害（風雪・暴風雪）、降雪や積雪（大雪）、路面凍結による交通障害や水道管の凍結（低温）、電線や船舶への雪の付着（着雪）などにも留意してください（括弧内は対応する注意報や警報等）。
- ▷ 季節風が西から関門海峡から流れ込む場合、中予や南予北部の平地でも大雪となることがあります。
- ▷ 2017年12月から2018年2月にかけて、ラニーニャ現象等を起因として、日本付近に強い寒気が流入し、全国的に低温と大雪に見舞われました（詳細：気象庁報道発表資料2018年 [2/1](#)、[2/15](#)、[3/5](#)）。



## 【気象用語】「解析積雪深」「解析降雪量」とは

「解析積雪深」とは、1時間ごとに約5km四方の細かさで積雪の深さを推定するものです。また、「解析降雪量」とは、同様に降雪量の実況を推定するものです。これらを利用すると、積雪計による観測が行われていない地域を含めた積雪や降雪の面的な状況を把握することができます。

ご利用の際は、気象庁ホームページの[現在の雪（解析積雪深・解析降雪量）](#)をご覧ください。



解析積雪深と解析降雪量の描画例(平成30年2月6日12時。日本時間)  
数字はアメダスの積雪計の観測値。単位はセンチメートル。

解析積雪深は、解析雨量や局地数値予報モデル(LFM)などの降水量、気温、日射量などを予測モデルに与えて積雪の深さを計算した後、アメダスの積雪計の観測値で補正を加えて作成されます。予測モデルでは、新たに積もる雪の量、融ける雪の量、時間の経過により積雪が沈み込む深さ等を計算することで積雪の深さを求めます。

解析降雪量は、解析積雪深が1時間に増加した量を1時間降雪量として作成します。例えば、9時の解析降雪量は解析積雪深が8時から9時までに増加した量となります。なお、解析積雪深が減少した場合は0となります。

### (利用上の留意点)

- ・これらは約5km四方の平均的な値であり、個別地点における観測値と必ずしも一致しません。積雪の深さや降雪量のおおまかな分布状況を把握するためにご利用ください。
- ・風が強い時は雪が風に流されるため、また、地上の気温が約1～3℃の時は雨雪の判別が難しいため、これらの精度が低下する可能性があります。